

823
M8N2

漢江入楚

推平

46

推本

正二載

年立二八正載卜

和此年立花島上六三ノ相違之十

九載卜飛ノ机ノ物ノ福抄ノ院九二載此ノ女也邊ノ
二月廿日比白兵部ノ家剛請也
淨京之次留宇治給事

又秀右之信清始餉也

意寧相中相春所運也

宇治八宮遺清是於意中將也

白宮見給有所運也

兼中將伴人々春八宮合物音也

白文也清是於宇治宮也

中君書所運也

有方約云春所運也

宇治家所廿年齡也

作君七五

中君七三

其秋宰相中相任中幼也

也

行川表ノ未ノ初同時

七月源中御云諸宇治也

推古

元弘元年刻為春名

ゆりゆりしつひに花をいしりきふりあまのつら
^女 春名ふ奇きし 蓮花二葉のまゝに次ぐのたにノ雙まのま
^毛 毛鳥ノ鏡不之用 義同
^{春名} 春名ふまのまゝに十九日廿二葉のまゝに次ぐのたにノ雙まのま
^毛 毛鳥ノ鏡不之用 義同
 の秋に中御言ふはあつゆるし竹川春と同河し

二月此日に行はるる 春名ふまのまゝに十九日廿二葉のまゝに次ぐのたにノ雙まのま

は 春名ふまのまゝに十九日廿二葉のまゝに次ぐのたにノ雙まのま

春名ふまのまゝに十九日廿二葉のまゝに次ぐのたにノ雙まのま

中宿のまゝに十九日廿二葉のまゝに次ぐのたにノ雙まのま

中宿のまゝに十九日廿二葉のまゝに次ぐのたにノ雙まのま

中宿のまゝに十九日廿二葉のまゝに次ぐのたにノ雙まのま

中宿のまゝに十九日廿二葉のまゝに次ぐのたにノ雙まのま

中宿のまゝに十九日廿二葉のまゝに次ぐのたにノ雙まのま

中宿のまゝに十九日廿二葉のまゝに次ぐのたにノ雙まのま

中宿のまゝに十九日廿二葉のまゝに次ぐのたにノ雙まのま

中宿のまゝに十九日廿二葉のまゝに次ぐのたにノ雙まのま

中宿のまゝに十九日廿二葉のまゝに次ぐのたにノ雙まのま

中宿のまゝに十九日廿二葉のまゝに次ぐのたにノ雙まのま

中宿のまゝに十九日廿二葉のまゝに次ぐのたにノ雙まのま

中宿のまゝに十九日廿二葉のまゝに次ぐのたにノ雙まのま

元久元の七月に所長を以て定家と云ひて定家
河合山後を以て月を以て里に名つてまゝに
又名不代女奇女子家後

夫れを以て名を以て下なるなり
夫れを以て名を以て下なるなり
夫れを以て名を以て下なるなり

夫れを以て名を以て下なるなり
夫れを以て名を以て下なるなり
夫れを以て名を以て下なるなり

夫れを以て名を以て下なるなり
夫れを以て名を以て下なるなり
夫れを以て名を以て下なるなり

夫れを以て名を以て下なるなり
夫れを以て名を以て下なるなり
夫れを以て名を以て下なるなり

左方 右方 左方

此は元久大長職公の別業之流なる陽成天皇志らるるくけ西よ出

此は元久大長職公の別業之流なる陽成天皇志らるるくけ西よ出

此は元久大長職公の別業之流なる陽成天皇志らるるくけ西よ出

此は元久大長職公の別業之流なる陽成天皇志らるるくけ西よ出

此は元久大長職公の別業之流なる陽成天皇志らるるくけ西よ出

此は元久大長職公の別業之流なる陽成天皇志らるるくけ西よ出

此は元久大長職公の別業之流なる陽成天皇志らるるくけ西よ出

此は元久大長職公の別業之流なる陽成天皇志らるるくけ西よ出

かういふ事にあひまふつはふり
源の侍第の言ふまはう

かひくしとるるやぬがた
清海一談の心

夫よりわが第の言致仕の好ま何とてし
柏木通するを
是の葉の第凡事し
彼もよき言く
大なる好ま

家初の本末なる
八雲の侍心

さし色おもひひとれま
* 清海とての習ふ心
葉もはみよとてし
清く好まされいふその好まの事

とらり初んとまのわりの心
いそりたるをたかみ
* 清海とての習ふ心
是の葉も後の句にけり
あまを好まも後人よかり

もこれ好ま
* 白文好ま
好まはるる
好まはるる
好まはるる

りる横河の心
川寺同
好まはるる
好まはるる
好まはるる

和詩ニモ 春日堪掌選根鏡見開花又落花とあり

はらひ柳をまきうらひくま

はらひ柳をまきうらひくま
* 和ニ六葉
柳をまきうらひくま
葉日本紀身十五

あふと白柳奇
あふと白柳奇
あふと白柳奇
あふと白柳奇

あふと白柳奇
あふと白柳奇
あふと白柳奇
あふと白柳奇

かれまは南うてる
葉の八雲子
あふと白柳奇

かまはるる
あふと白柳奇
あふと白柳奇
あふと白柳奇

あふと白柳奇
あふと白柳奇
あふと白柳奇
あふと白柳奇

あふと白柳奇
あふと白柳奇
あふと白柳奇
あふと白柳奇

文の月を何となくし 白文の序めをうらむし 後日
をを此うさつは浪のなを月もかた吹く人守後の川に夢
* ちかちかこころりんかんとて流ひをとし

中將をまきくはらふ 女ありかし 後日
あつひよふいまぬらぬら 羊若君まじりまじり
こころあつはらふと ぬわしし の体し

つんをいらくはらひて 醍醐樂に右樂をいらくとある
本をそら水樂 壹越調を新樂に多し道進かれまてした
このそらつを水樂と古本にあつくしをいらくとある

書字に得り丸又勸盤の席をれ 醍醐樂を其もせりたり
あつはらひ酒宴の爰後とてしつらぬく此曲と堂歌をん
前後をらうや式況にうは初なれ道進しやうと右未とひら
りるんとも不可能死とつら知しをあるのそらつをらふ廊と
あつはらひ何れも樂うとやあつはらひしとをそらつをらふ
村上沖記應和元年閏二月十一日首宴舟中奏醍醐樂舟中人

今案醍醐樂は右樂也舟中其例もせらうや 花多のそらつ

河花アリ 私箋に支儀の門の事とまはし奇しき沙汰
句は但於舟中例を司ゆべきし 河初夜の道進右系
如何とて此不して流汗此曲唯夕夕をしと足とある
されは聖日此事し 舞のそらつをらふし ぬわしし

あつはらひをまじりらうし 水いまれまじりぬをの節し
ゆらあつはらひるし 舟中流院代事し

私此箋如何守流院 其介白文に好ひるし ぬわしら
後よつらるるはまぢかたし ぬわしら ぬわしら
ぬわしら ぬわしら ぬわしら ぬわしら ぬわしら
ゆらあつはらひるし ぬわしら ぬわしら

山雲をいりぬら 河に屏風かたし 普通此細代をえ
山雲をいりぬら 河に屏風かたし 普通此細代をえ
山雲をいりぬら 河に屏風かたし 普通此細代をえ

深骨小い面をうらりて細廻して用合せらる也

遂屏風と云又句あり後乃屏風と云ものるれ車丸物あり

後乃行々日小志うくさして細さる物こそこの辨れ物也

さるらりてて危くさる也 如 勢ひきるる様よきうらりて

美 さまさるるひを慶とかなは辨かたり

むき物と云 後 の勢かたり

いららりてうたはらうらりて人あさるひも は 橋人二位よ

地久波 日音 予難双河 さうらりてのぬらりてわらりて

とさぬらりてられるとさうらりてやうらりて 一 能あさる

らんやあさるや 一 能 二 能 三 能 四 能 五 能 六 能 七 能 八 能 九 能 十 能

まうまうさぬくせうらりてあさるさうらりて 一 能 二 能 三 能 四 能 五 能 六 能 七 能 八 能 九 能 十 能

うらりてやうらりて 催 てもまが

也 橋人の呂奇し呂に双洞津に半洞し双洞の馬をいさう臺紙洞

出て吹あし臺紙洞を別又呂に臺紙中将を橋人と申す 一 能 二 能 三 能 四 能 五 能 六 能 七 能 八 能 九 能 十 能

如 橋人を呂奇し呂に双洞津に半洞し双洞の馬をいさう臺紙洞

橋人志願しとのぬらりてうらりてのぬらりて

あうらりてのぬらりて 八 能 九 能 十 能 一 能 二 能 三 能 四 能 五 能 六 能 七 能 八 能 九 能 十 能

等 橋人を双れ上りて皆さうらりて 一 能 二 能 三 能 四 能 五 能 六 能 七 能 八 能 九 能 十 能

早下り 一 能 二 能 三 能 四 能 五 能 六 能 七 能 八 能 九 能 十 能

みするれぬらりて 如 勢手曲るさうらりて

あまうらりて 如 勢手 一 能 二 能 三 能 四 能 五 能 六 能 七 能 八 能 九 能 十 能

かぬらりて 如 勢手 一 能 二 能 三 能 四 能 五 能 六 能 七 能 八 能 九 能 十 能

は 生海王 け 加徳 三 生王 長 木橋 と 有 お 月 さ 西位 の 古 人 は 西位 と 申 す 也

古今序人丸正之位とありき 一 能 二 能 三 能 四 能 五 能 六 能 七 能 八 能 九 能 十 能

但是ともは説よあやうらりて 一 能 二 能 三 能 四 能 五 能 六 能 七 能 八 能 九 能 十 能

あひま 一 能 二 能 三 能 四 能 五 能 六 能 七 能 八 能 九 能 十 能

あひま 一 能 二 能 三 能 四 能 五 能 六 能 七 能 八 能 九 能 十 能

色 一 能 二 能 三 能 四 能 五 能 六 能 七 能 八 能 九 能 十 能

は 瓶子取人 一 能 二 能 三 能 四 能 五 能 六 能 七 能 八 能 九 能 十 能

如 勢手 一 能 二 能 三 能 四 能 五 能 六 能 七 能 八 能 九 能 十 能

後々いまい〜 松山ありあまし

わがまきちりとな〜 多んもたれ日すし

く〜の〜たれた〜 飯上章し事

山さ〜にありあ〜 折てま〜

家う〜の〜の〜 折てま〜

娘あ〜の〜の〜 折てま〜

我う〜の〜の〜 折てま〜

思〜の〜の〜 折てま〜

望〜の〜の〜 折てま〜

むら〜の〜の〜 折てま〜

普通〜の〜の〜 折てま〜

白〜の〜の〜 折てま〜

其の〜の〜の〜 折てま〜

其れ〜の〜の〜 折てま〜

川〜の〜の〜 折てま〜

ゆ〜の〜の〜 折てま〜

流〜の〜の〜 折てま〜

あ〜の〜の〜 折てま〜

か〜の〜の〜 折てま〜

早〜の〜の〜 折てま〜

其れ〜の〜の〜 折てま〜

野〜の〜の〜 折てま〜

い〜の〜の〜 折てま〜

白〜の〜の〜 折てま〜

何〜の〜の〜 折てま〜

何〜の〜の〜 折てま〜

ま〜の〜の〜 折てま〜

ま〜の〜の〜 折てま〜

ゆ〜の〜の〜 折てま〜

何〜の〜の〜 折てま〜

其秋中納言よりぬきふとて 苑多三年之此得るハ友
しりし物事ぬきし 蓮九二葉し其秋といふ言定候し
まむしひのひり 四の秋し なるの宰相をして此秋とみるを
うし 五の得るありし 竹川より 念の果を此事をうけり
し 此時と同時なり

手
白言の中候し 春好ひのひり 一年此秋といふ言蓮九
宰相その秋と云ふ不苗すし 橋姫の宰相して三年
しりしとて 作はみり 果を此事とちりし 内時此
は宰相中将竹川奉 中納言とて 今入は秋中納言とて
の同時分明

いふ言し いかき なるわたりし 女 蓮九二葉を
さうにけりて ともぬき ありひけり けりまふかり
も なるれり 又とちりし 事し 蓮
か けりし ともぬき 事し なるれり 相承此事
なるなるし ともぬき なるなるし なるなるし なるなるし
なるなるし なるなるし なるなるし なるなるし

このひりよき母をいかり へれぬ 一 木れすかり

此をいかり せんし せんし せんし せんし せんし
かれを人とし 何れをいかり せんし せんし せんし せんし
こり なるし せんし せんし せんし せんし せんし せんし せんし
是れ 妙し

宇治の南より せんし せんし せんし せんし せんし
く なるし せんし せんし せんし せんし せんし せんし せんし

七月のりり なるし なるし なるし なるし なるし
て 七月のりり なるし なるし なるし なるし なるし なるし なるし
なるし なるし なるし なるし なるし なるし なるし なるし
なるし なるし なるし なるし なるし なるし なるし なるし

今 なるし なるし なるし なるし なるし なるし なるし なるし
なるし なるし なるし なるし なるし なるし なるし なるし
なるし なるし なるし なるし なるし なるし なるし なるし

なるし なるし なるし なるし なるし なるし なるし なるし
なるし なるし なるし なるし なるし なるし なるし なるし
なるし なるし なるし なるし なるし なるし なるし なるし

殺之故奪跡連地照宿於其邑有腰折田飯也

神龜三年冬諸王始進相模人

七月十六日開相模石仰也

廿六日内

小月才五日此八石合

小月才七月或九日拔出小

月九八日也

諸國之供御人をりしけりしと清俊も

初八石合後よりりて清俊もを後出とりて

向きれりし此とくまつりてかきしりて

蓋の八まへゆりしりて

女并ノ危

彼とりしりて此とくまつりて

柏木此事のりまがら

馬つりしりて

女并をさし

月此兼中へりし入るし真ゆりて

蓋の音ゆりしりて

ふりしりてゆりしりて

女并をさし

とまひしりてゆりしりて

女蓋の白まはり

とまひしりて

女并の危

清ふりしりてゆりしりて

女八まはり

ゆりしりて

ふりしりてゆりしりて

ふりしりて

女八まはり

ふりしりて

女八まはり

ふりしりて

女八まはり

ふりしりて

ふりしりて

女八まはり

ふりしりて

秋ふりしりて

八月

悲哉秋之為氣蕭瑟

秋ハ暮梔門ナリ

ふりしりて

女八まはり

ふりしりて

女 阿彌陀佛にちりてちりてのなり

四季に念仏のし 傳教大師云 當捨惡見諸緣支

當發寂勝菩提心 應當速向簡若處 致彼當成如來德

阿彌陀佛執持名号若一日乃至七日一心不乱 阿彌陀經文

世に下りてして後よわむと

女 八文の刻にせめてしるは世に定むるなり

あつてりてしるは世に定むるなり 徒後見るとしてしる

かたに世の定まらばしるは世に定むるなり 女 登

位長夜臺 日 親を慈知門柱

私をわりのけしに家の人を長夜臺に

けしに家の人を長夜臺に 女 登

けしに家の人を長夜臺に 女 登

けしに家の人を長夜臺に 女 登

けしに家の人を長夜臺に 女 登

けしに家の人を長夜臺に 女 登

この山里をめぐりてしるは世に定むるなり

大長れ山をめぐりてしるは世に定むるなり

月がかりのなり

女 一向はあつてしるは世に定むるなり

右の田原の長けをめぐりてしるは世に定むるなり

女 一向はあつてしるは世に定むるなり

一向はあつてしるは世に定むるなり

女 一向はあつてしるは世に定むるなり

女 一向はあつてしるは世に定むるなり

女 一向はあつてしるは世に定むるなり

女 一向はあつてしるは世に定むるなり

女 一向はあつてしるは世に定むるなり

女 一向はあつてしるは世に定むるなり

女 一向はあつてしるは世に定むるなり

女 一向はあつてしるは世に定むるなり

八宮のつらみ海とらみ危まる姫君をまはれん

後もしりしらふいよと命

史記云字惠帝崩大驚哭泣不

下 其見何悔

顔淵死子哭之慟

哭ハ泣ト云後漢ガ心也歎ノ切ナリ時

杜詩云發定却城後と ありありあきれるる 幸よそ中

く後なるあしんをさうまのゆんるわくを附しうあ

こはおあくて洞かろく物し杜詩さうのんを伴する

杜子美、發定初城後とつる夕と引り面白

杜詩發定

おはつらなさうひて 後集とつらなまはれん

うきうきと通かろわれん 女七巻

其は法しとに義なり上の幼少色くれり

今文しとるるうさうとこり 女七巻

又のひんのもまうたんと 八文をけ連し姫君をま

再会するさうまきととよりとせしと

しりしと仲んとゆんあまうま 姫君をまはれん

いしあまうまはれんあまうま 女七巻

おはれとつらなまはれん

さうととちを聖しとつらなまはれん

入道か所かひをひく

水玉とつらなまはれん

又ふれりしとつらなまはれん

おはれんを似合つるすし上為れ風をのてうらま

うらまをりしとつらなまはれん

月影ゆらゆらとつらなまはれん

清んとかのうらま

女七巻

中細言とのよきつらなまはれん

又あひらるるしとつらなまはれん

世れらるるさげんうらま

あまのりしとつらなまはれん

あまのりしとつらなまはれん

後集行状記

後集行状記

おがりしぬ御んらとよ 娘を色ん中しつゝあつた

ふしんときひひつゝまふかり

よれつゝあつたのよれぬよ 是と天子れつゝあれ

おきれまふつゝハまかしていふはねきりなれ

よつゝの親子のよれの娘よあひひつゝ

そつゝあつたの娘をさつゝあつた

あつたあつたつゝあつた ぬれつゝあつた

わつゝあつたつゝあつた

人志すぬ移やつゝあつたつゝあつた

お不及引弄れ

お美美：不用しぬ娘を色ん中しつゝあつた

お美美の娘とあつたつゝあつた

あつたあつたつゝあつた

あつたあつたつゝあつた

お美美の娘とあつたつゝあつた

お美美の娘とあつたつゝあつた

お美美の娘とあつたつゝあつた

お美美の娘とあつたつゝあつた

お美美の娘とあつたつゝあつた

お美美の娘とあつたつゝあつた

お美美の娘とあつたつゝあつた

お美美の娘とあつたつゝあつた

お美美の娘とあつたつゝあつた

お美美の娘とあつたつゝあつた

お美美の娘とあつたつゝあつた

お美美の娘とあつたつゝあつた

お美美の娘とあつたつゝあつた

お美美の娘とあつたつゝあつた

お美美の娘とあつたつゝあつた

かたゆたきとえんききやつとせんと 女 面白き初し

も 崔相如く趙壁にまこととみとなく おれ底をたけりありあつみ

ゆきしゆり あつちまきしかり

此ふたしと 白まじ まじり 娘君をたれつ中し

かけり あけやう 白れん

こま 白まの あはれ 白し

ま あはれ あはれ

白ま あはれ あはれ あはれ

あはれ あはれ あはれ あはれ

あはれ あはれ あはれ あはれ

あはれ あはれ あはれ あはれ

あはれ あはれ あはれ あはれ

あはれ あはれ あはれ

あはれ あはれ あはれ

あはれ あはれ あはれ

あはれ あはれ あはれ

あはれ あはれ あはれ

あはれ あはれ あはれ

あはれ あはれ あはれ

あはれ あはれ あはれ

あはれ あはれ あはれ

あはれ あはれ あはれ

あはれ あはれ あはれ

あはれ あはれ あはれ

あはれ あはれ あはれ

あはれ あはれ あはれ

あはれ あはれ あはれ

あはれ あはれ あはれ

あはれ あはれ あはれ

あはれ あはれ あはれ

後うりつれ初る理が海しと

私に記あるあまの思ふは深きちしふかみ下
月日此彩の清ふもてそれくち 毎月同れをみわ

たれ方よりむらうくをあつた月日此とすうては
いづれもあつた

大君の思ふをいふもあつた 毎 大君の思ふをいふもあつた

して物倍よと志まつた 毎 蕙の宮ふん

又おろきん 毎 蕙の司かこり

又おろきん 毎 蕙の司かこり

又おろきん 毎 蕙の司かこり

又おろきん 毎 蕙の司かこり

又おろきん 毎 蕙の司かこり

又おろきん 毎 蕙の司かこり

又おろきん 毎 蕙の司かこり

又おろきん 毎 蕙の司かこり

又おろきん 毎 蕙の司かこり

又おろきん 毎 蕙の司かこり

又おろきん 毎 蕙の司かこり

又おろきん 毎 蕙の司かこり

ほ かけまくもろくこねん

も かけつゝあふなりんや下はとみり

お けは花を妻に説くしにうすし お花を説く説く

か けくくも彼仲とわやまきん お花を説く説く

お けくくも彼仲とわやまきん お花を説く説く

か りしるまゆりもろく お花を説く説く

いんをまきん お花を説く説く

ゆきまきん お花を説く説く

お けくくも彼仲とわやまきん お花を説く説く

お けくくも彼仲とわやまきん お花を説く説く

お けくくも彼仲とわやまきん お花を説く説く

お けくくも彼仲とわやまきん お花を説く説く

お けくくも彼仲とわやまきん お花を説く説く

お けくくも彼仲とわやまきん お花を説く説く

お けくくも彼仲とわやまきん お花を説く説く

お けくくも彼仲とわやまきん お花を説く説く

お けくくも彼仲とわやまきん お花を説く説く

お けくくも彼仲とわやまきん お花を説く説く

お けくくも彼仲とわやまきん お花を説く説く

お けくくも彼仲とわやまきん お花を説く説く

お けくくも彼仲とわやまきん お花を説く説く

お けくくも彼仲とわやまきん お花を説く説く

お けくくも彼仲とわやまきん お花を説く説く

お けくくも彼仲とわやまきん お花を説く説く

お けくくも彼仲とわやまきん お花を説く説く

お けくくも彼仲とわやまきん お花を説く説く

お けくくも彼仲とわやまきん お花を説く説く

お けくくも彼仲とわやまきん お花を説く説く

お けくくも彼仲とわやまきん お花を説く説く

お けくくも彼仲とわやまきん お花を説く説く

夜撰

日集

うらうらうと色づきも夜がけや暮る秋ににかりしとき
ひびくふかふかなきよりのもさへつるここのこ鳴きつらん
今ハさうりともつゆさくしよし 夜 空おしやぬ娘も連れ

つゆさくしよし 夜 空おしやぬ娘も連れ
つゆさくしよし 夜 空おしやぬ娘も連れ

つゆさくしよし 夜 空おしやぬ娘も連れ
つゆさくしよし 夜 空おしやぬ娘も連れ

つゆさくしよし 夜 空おしやぬ娘も連れ
つゆさくしよし 夜 空おしやぬ娘も連れ

つゆさくしよし 夜 空おしやぬ娘も連れ
つゆさくしよし 夜 空おしやぬ娘も連れ

つゆさくしよし 夜 空おしやぬ娘も連れ
つゆさくしよし 夜 空おしやぬ娘も連れ

つゆさくしよし 夜 空おしやぬ娘も連れ
つゆさくしよし 夜 空おしやぬ娘も連れ

つゆさくしよし 夜 空おしやぬ娘も連れ
つゆさくしよし 夜 空おしやぬ娘も連れ

つゆさくしよし 夜 空おしやぬ娘も連れ
つゆさくしよし 夜 空おしやぬ娘も連れ

つゆさくしよし 夜 空おしやぬ娘も連れ
つゆさくしよし 夜 空おしやぬ娘も連れ

つゆさくしよし 夜 空おしやぬ娘も連れ
つゆさくしよし 夜 空おしやぬ娘も連れ

つゆさくしよし 夜 空おしやぬ娘も連れ
つゆさくしよし 夜 空おしやぬ娘も連れ

つゆさくしよし 夜 空おしやぬ娘も連れ
つゆさくしよし 夜 空おしやぬ娘も連れ

つゆさくしよし 夜 空おしやぬ娘も連れ
つゆさくしよし 夜 空おしやぬ娘も連れ

つゆさくしよし 夜 空おしやぬ娘も連れ
つゆさくしよし 夜 空おしやぬ娘も連れ

つゆさくしよし 夜 空おしやぬ娘も連れ
つゆさくしよし 夜 空おしやぬ娘も連れ

此君をいふは余の事なり... 二れ... 女...

女... 好... 事...

私... 年... 女...

女... 好... 事... 私... 年... 女...

女... 好... 事... 私... 年... 女... 女...

女... 好... 事... 私... 年... 女... 女... 女...

女... 好... 事... 私... 年... 女... 女... 女... 女...

女... 好... 事... 私... 年... 女... 女... 女... 女... 女...

女... 好... 事... 私... 年... 女... 女... 女... 女... 女... 女...

不及此... 女...

女... 好... 事... 私... 年... 女... 女... 女... 女... 女... 女...

女... 好... 事... 私... 年... 女... 女... 女... 女... 女... 女...

女... 好... 事... 私... 年... 女... 女... 女... 女... 女... 女...

女... 好... 事... 私... 年... 女... 女... 女... 女... 女... 女...

女... 好... 事... 私... 年... 女... 女... 女... 女... 女... 女...

女... 好... 事... 私... 年... 女... 女... 女... 女... 女... 女...

女... 好... 事... 私... 年... 女... 女... 女... 女... 女... 女...

とくしきすしありきし 夫 けりれ白文よりし書
よわふうし白文れせゆしめりし 夫
又いしきまきあふし 白文れ世よりし
宮あしかりき

うにせししもがく色すしとせりひき
妻 白文れ業とせり
白文の業次がかりしと宮あり
運がれりぬかりしとてこがひ 姫君の運がれり

まことのまう人いとこよありと見えありきひすしぬと
此の何ものまじりれき人ともありきしにうしと母しとのん書りしん

必 此の宮に里のまう人き家りかやとてし
川平に傳れ伝きしと 川平の御方とて人きとてしん書りし

夫 川平の御方とて人きとてしん書りし
川平の御方とて人きとてしん書りし

必 川平の御方とて人きとてしん書りし
私宅に書りし 夫 川平の御方とて人きとてしん書りし

何ういしとてしん書りし 夫 川平の御方とて人きとてしん書りし

必 川平の御方とて人きとてしん書りし
夫 川平の御方とて人きとてしん書りし

必 川平の御方とて人きとてしん書りし
夫 川平の御方とて人きとてしん書りし

必 川平の御方とて人きとてしん書りし
夫 川平の御方とて人きとてしん書りし

必 川平の御方とて人きとてしん書りし
夫 川平の御方とて人きとてしん書りし

必 川平の御方とて人きとてしん書りし
夫 川平の御方とて人きとてしん書りし

必 川平の御方とて人きとてしん書りし
夫 川平の御方とて人きとてしん書りし

必 川平の御方とて人きとてしん書りし
夫 川平の御方とて人きとてしん書りし

必 川平の御方とて人きとてしん書りし
夫 川平の御方とて人きとてしん書りし

ふらふらと歩くはよむとて後へ 一きりぬるは
くつしとて見えてハ 女 是色よのぬる人其のけしね

まはるるをきくはすみこしあつら名といふは下流川
とハツラ川に流るはゆきぬるは下流川

ま 女 こまはよのぬる人のけしねゆきぬるは下流川

ま 女 まはるるをきくはすみこしあつら名といふは下流川

ま 女 こまはよのぬる人のけしねゆきぬるは下流川

ま 女 まはるるをきくはすみこしあつら名といふは下流川

ま 女 こまはよのぬる人のけしねゆきぬるは下流川

ま 女 まはるるをきくはすみこしあつら名といふは下流川

ま 女 こまはよのぬる人のけしねゆきぬるは下流川

ま 女 まはるるをきくはすみこしあつら名といふは下流川

ま 女 こまはよのぬる人のけしねゆきぬるは下流川

ま 女 まはるるをきくはすみこしあつら名といふは下流川

ま 女 こまはよのぬる人のけしねゆきぬるは下流川

ま 女 まはるるをきくはすみこしあつら名といふは下流川

ま 女 こまはよのぬる人のけしねゆきぬるは下流川

ま 女 まはるるをきくはすみこしあつら名といふは下流川

ま 女 こまはよのぬる人のけしねゆきぬるは下流川

ま 女 まはるるをきくはすみこしあつら名といふは下流川

（忠か）わめきそ
わやめきしんんとそんとし
いりきりはうきくしきた
お姫君の初めはしと

こつひ空を家母のうきをるれめき物とし
おまは葉子トおのりりかに家色のとまうし
かりとわかしてきて白まは事より人ふくまとし
必も沖んうまうとくさくさくし
おまは葉子トおのりりかに家色のとまうし

おまは葉子トおのりりかに家色のとまうし
おまは葉子トおのりりかに家色のとまうし
おまは葉子トおのりりかに家色のとまうし
おまは葉子トおのりりかに家色のとまうし

おまは葉子トおのりりかに家色のとまうし
おまは葉子トおのりりかに家色のとまうし
おまは葉子トおのりりかに家色のとまうし
おまは葉子トおのりりかに家色のとまうし

おまは葉子トおのりりかに家色のとまうし
おまは葉子トおのりりかに家色のとまうし
おまは葉子トおのりりかに家色のとまうし
おまは葉子トおのりりかに家色のとまうし

おまは葉子トおのりりかに家色のとまうし
おまは葉子トおのりりかに家色のとまうし
おまは葉子トおのりりかに家色のとまうし
おまは葉子トおのりりかに家色のとまうし

おまは葉子トおのりりかに家色のとまうし
おまは葉子トおのりりかに家色のとまうし
おまは葉子トおのりりかに家色のとまうし
おまは葉子トおのりりかに家色のとまうし

おまは葉子トおのりりかに家色のとまうし
おまは葉子トおのりりかに家色のとまうし
おまは葉子トおのりりかに家色のとまうし
おまは葉子トおのりりかに家色のとまうし

しづれは津多れを〜人々
よの兵人忠事し

いふよとたり〜まきまて
* 友多れ津後し〜りこれ約

世中たよのじぶらうんをゆ〜ね
* ともめ人約

いふ〜しんおれり〜とふか
* 友多れときのも〜と後し

も俺人あつた〜く立よふ〜り
* 友多れときのも〜と後し

お〜〜南〜、かこ
* 友多れときのも〜と後し

いよの井人今ほを〜せ〜ゆりし
* 友多れときのも〜と後し

仏の〜と花の〜ゆり〜とと後し
* 友多れときのも〜と後し

此流と可相し〜の〜と〜と後し
* 友多れときのも〜と後し

瑠璃かよの才し〜又花危かあり
* 友多れときのも〜と後し

かこか〜ひ〜の〜り〜と〜と後し
* 友多れときのも〜と後し

お〜は〜な〜つ〜い〜もの〜と〜と後し
* 友多れときのも〜と後し

〜と〜と〜と〜と〜と〜と後し
* 友多れときのも〜と後し

〜ひ〜の〜と〜と〜と〜と後し
* 友多れときのも〜と後し

〜か〜ら〜と〜と〜と〜と後し
* 友多れときのも〜と後し

〜り〜と〜と〜と〜と後し
* 友多れときのも〜と後し

〜事〜と〜と〜と〜と後し
* 友多れときのも〜と後し

〜と〜と〜と〜と後し
* 友多れときのも〜と後し

〜か〜い〜と〜と〜と〜と後し
* 友多れときのも〜と後し

〜ま〜の〜と〜と〜と〜と後し
* 友多れときのも〜と後し

〜多〜ら〜と〜と〜と〜と後し
* 友多れときのも〜と後し

〜と〜と〜と〜と後し
* 友多れときのも〜と後し

〜我〜の〜と〜と〜と〜と後し
* 友多れときのも〜と後し

〜と〜と〜と〜と後し
* 友多れときのも〜と後し

〜と〜と〜と〜と後し
* 友多れときのも〜と後し

〜と〜と〜と〜と後し
* 友多れときのも〜と後し

〜と〜と〜と〜と後し
* 友多れときのも〜と後し

〜と〜と〜と〜と後し
* 友多れときのも〜と後し

〜と〜と〜と〜と後し
* 友多れときのも〜と後し

〜と〜と〜と〜と後し
* 友多れときのも〜と後し

見ゆらばしつらゆけを人しくよ 女 羞のきしゆをよとて内を

かしてよゆらん 女 羞のきしゆをよとて内を

を人しくゆきつりし 女 羞のきしゆをよとて内を

年 女 羞のきしゆをよとて内を

年 女 羞のきしゆをよとて内を

年 女 羞のきしゆをよとて内を

年 女 羞のきしゆをよとて内を

年 女 羞のきしゆをよとて内を

年 女 羞のきしゆをよとて内を

年 女 羞のきしゆをよとて内を

年 女 羞のきしゆをよとて内を

年 女 羞のきしゆをよとて内を

年 女 羞のきしゆをよとて内を

年 女 羞のきしゆをよとて内を

年 女 羞のきしゆをよとて内を

年 女 羞のきしゆをよとて内を

年 女 羞のきしゆをよとて内を

年 女 羞のきしゆをよとて内を

年 女 羞のきしゆをよとて内を

年 女 羞のきしゆをよとて内を

年 女 羞のきしゆをよとて内を

年 女 羞のきしゆをよとて内を

年 女 羞のきしゆをよとて内を

年 女 羞のきしゆをよとて内を

年 女 羞のきしゆをよとて内を

年 女 羞のきしゆをよとて内を

年 女 羞のきしゆをよとて内を

年 女 羞のきしゆをよとて内を

年 女 羞のきしゆをよとて内を

年 女 羞のきしゆをよとて内を

有牧矣背而麦荷子者欲秋之至尊雖有逼々之意亦已疏實

言未其蔽 毛詩草出焉

言未其蔽 毛詩草出焉

言未其蔽 毛詩草出焉

言未其蔽 毛詩草出焉

言未其蔽 毛詩草出焉

言未其蔽 毛詩草出焉

言未其蔽 毛詩草出焉

言未其蔽 毛詩草出焉

言未其蔽 毛詩草出焉

言未其蔽 毛詩草出焉

言未其蔽 毛詩草出焉

言未其蔽 毛詩草出焉

言未其蔽 毛詩草出焉

言未其蔽 毛詩草出焉

とててそる麻ぬ 花障子れらるる葦の糸より方
とてそる麻ぬかゝる

初まやうて見えぬ 子くんとせきりし

こりとはま丁とく人そそゆり けしめりるさし

けめさめとくりにま丁れあさるわら

初まうるわらしし也 *葦の立ゆらしし也 其也

風をとりれとくさう吹めくれ みるされわりて也

着たりと

これ許来丁とくわくしと 其障子れあさるさよあり

あま来丁とくわんとなとくせもり

たきもえんしとわら きさきさきれ来丁しとく

あま来丁とく 二回も着たり

けしめりしと葦のれらる障子とてそるさし

いれ障子とてそるさしとくわら

あま来丁とく *始君もわらあま

あま来丁とく 其日

あま来丁とく *中も 其也

此所ともれんとて 葦の沖供也

これすひも中初し人よとくしとく

濃浪文 萱草文 あま来丁とく服をれとて

あま来丁とく *けり

柔 物まうてあまに女のとて 問云 中君

服中れまし何の帯にうけ帯れまのり 言云 帯と

りか帯をれりうと帯とぬらうとや服をれ文い

とあひ文かり 問云 初まうとくやうかゝり物か

るうとけ申あが 言云 唐衣よりひらり物なり小腰

川腰とてさうし 葦 人あさるやうに念誦なり物也

上右にかり

さひやうな帯とてあまけだるのさうりきたる

